

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2019年12月7日

文責：JUN

## 大切なことは必ず子どもが出してくる

その題材のもっとも大切なことは、教師が教えようとしなくとも、必ず子どもが出してきます。私たち教師は、そう信じるのが大切です。もちろん、学びに落ち着いて取り組む意欲が培われていて、その題材と正面から向き合える手立てが講じられていなければなりません。それを実行してさえいれば、教師は子どもの出方を待ち、出された子どもの考えを全身で受け止めるように心がければよいのです。

同じ学校の二人の若い教師の国語の授業を見る機会がありました。見ていてうれしくなりました。どちらの学級も、子どもたちがとってもいいのです。落ち着いていて、しっかり学びに向かっています。もちろん二人がそれぞれに真摯に取り組んできた結果なのだけれど、その努力がこれだけの結果につながったということは、二人の学校がかなり良い状態なのになにがありません。

ところで、これだけ子どもの状態がよければ、前述したように、その題材のもっとも大切なことは子どもが出してくるはずですが、もちろん、教師が教え急いでしまわないで、子どもの考えを待たなければいけません。二人ともそのようにできています。これなら、きっと私の考えどおりになるはずだ、そんな期待を抱きながら私は授業を見守りました。

### 1. かえるくんの「しあわせ」も！ ～2年「お手紙」の授業～

この日、子どもたちが読んでいたのは、物語の最後、がまくんとかえるくんの二人が、玄関に出て手紙が届くのを待っている場面でした。

互いの読みを聴き合い、作品の文章を味わうように読むことで、一人ひとりの読みが深くなる、それが文学の授業のあるべきすがたです。それには、この場面ならどこに光が当たればよいのでしょうか。授業をする教師は、事前の教材研究において、そして、子どもの読みを味わいながらも、常にそのことを心に宿していなければなりません。もちろん、それは独断的で固定的な教師の勝手な解釈ではなく、文章の叙述に適合したものでなければならぬし、それを教えようとしていないことも大切です。

この場面は、手紙がこないと嘆くがまくんと、そんながまくんの状態に心を痛め、手紙をしたためてその配達をかたつむりくんに託したかえるくんが、とうとうそのような行動をとったことをがまくんに言ってしまうという、いわば物語の山場を越えた後の余韻のようなところです。ですから、ここではそれほど複雑なことが書かれているわけではありません。二人の心がぶつかり合いながらもつながっていった状況をしっかりと思い出しながらほっこりと読み終えればよいのでしょうか。ただ、そんななかでも、1点だけ大切にしたいことがあります。それは、「ふたりとも、とても しあわせな気持ちで、そこに すわっていました。」というところです。

子どもたちは、お手紙がこないと嘆くがまくんに手紙が来るということで、よかった、がまくんはうれしいだろうと感じているはずです。そう読んで当然です。けれども、ここには「ふたりとも」と書かれているのです。つまり、「しあわせな気持ち」になったのはがまくんだけでなくかえるくんもなのです。

この物語は、『かえるくんとがまくん』シリーズに収められている作品です。このシリーズは『ふたりはともだち』『ふたりはいっしょ』『ふたりはいつも』『ふたりはきょうも』と続くのですが、すべてが「ふたりは」で始まっていることからわかるように、かえるくんとがまくんの心の通い合いを描いています。ですから、ここでも、お手紙をもらえることになったがまくんのことだけでなく、かえるくんの「しあわせな気持ち」も感じ取らなければなりません。しかし、ややもすると、かえるくんのことを忘れて、手紙をもらったがまくんのことだけに子どもは走ってしまう可能性があります。それを押しとどめてかえるくんの「しあわせ」も考えてもらおうという作者の意図の表れが「ふたりとも」です。果たして子どもたちは、がまくんだけでなく、かえるくんの「しあわせ」を出してくるでしょうか。一人目の子どもは次のように語りました。

「かえるくんは、がまくんが『お手紙もらったことがない』って言ってたから、お手紙を渡そうとして、でも、がまくんは『もう誰もお手紙くれなかった』って言ってたから、『絶対』って言ってたけど、かえるくんが『きつとくるよ』と言ってたところで、どんだんがまくんが元気になってきてるから、悲しい気持ちからしあわせな気持ちに変わったのは、かえるくんがお手紙をわたしたことを言ったからだと思う」

そして、二人目の子どもがこう語ります。

「最初は、がまくんは『絶対にお手紙がこない』と思って、悲しそうな顔してたけど、かえるくんは、お手紙に書いたことばを言って、がまくんはお手紙が来ることがわかって、最初はこないと思ってたから、(直前に黒板に描いたがまくんの絵について)目がつぶられなくて、来るってわかったから目がつぶられた(目をつぶることができた)」

子どもたちは、やはりがまくんの「しあわせ」を語ってきました。もちろんそれはかえるくんによってもたらされたものなので、そのことはきっちり語っていますが、「しあわせ感」についてはがまくんのことだと読んできています。

教師は、この後、一人の子どもに音読をさせます。文章に戻し文章から読むという点でとてもよいことです。そのうえ、音読の後、ペアで語り合うようにしました。この二つをセットにして行うのもとてもよいことです。

そうしたところ、次のように子どもが出してきたのです。

「昨日、Kちゃんが、がまくんが『ばかにするなよ』って言ってたところから、かえるくんは傷ついたって言ってたけど、そこからちょっと気づいたんたげと、……最初らへんにがまくんはお手紙を待つのが悲しくて、途中、なんか『ばからしいこと言うな』とか言ったから、かえるくんはKちゃんが言ったように(傷ついた)…けど、最後は、がまくんは、かえるくんがお手紙を書いたって言ったからうれしくなって、かえるくんは、最初は『ばからしいこと言うなよ』とかがまくんが言っていたから、それを気づいてくれてうれしくなったと思う」

やっぱり、出ました。子どもたちはかえるくんの「しあわせ感」も感じていたのです。がまくんの「しあわせ感」を述べていた二人の子どももかえるくんとのかかわりはちゃんと語っています。そして、かえるくんの「しあわせ感」を語った3人目の子どももがまくんとのかかわりをもとに語ってい

ます。子どもたちは「ふたりはともだち」という原本そのままに読んでいたのです。

ただ、こうしてがまくんだけでなくかえるくんの「しあわせ」も出てきたこのチャンスを教師は逃がしてはなりません。この瞬間こそ「ふたりとも」を読む絶好機なのです。しかも、3人目の子どもの発言が終わったその瞬間、別の子どもが「やっと気づいてもらった」とつぶやいたのです。こういう子どものつぶやきは本気で考えているときふっと口に出るものなので真実味があります。まさにここがチャンスです。

「そうかあ！ がまくんもううれしいけど、気づいてもらってかえるくんもううれしいのか。そのところ、どう書いてあるかももう一度音読してもらいましょう。そして、がまくんとかえるくんの『しあわせ』を、どちらも感じ取りましょう」

こうして音読を入れるのです。何を感じ取るのかがはっきりしているので、子どもはそのことを頭に浮かべて読み聴くことでしょう。1人でなく2人に読ませてもいいでしょう。そうしておいて、ふたりの「しあわせ」をペアでじっくり語り聴き合うようにするのです。

## 2. 子どもはくものくじらから読み始めた！ ～1年「くじらぐも」の授業～

「くじらぐも」の授業は、1年2組の子どもたちがくものくじらに乗れた後の、次のような文章のところを読んでいるところでした。

—— 「さあ、およぐぞ。」／くじらは、青い 青い 空の なかを、げんき いっぱい  
すすんで いきました。うみの ほうへ、むらの ほうへ、まちのほうへ。／みんなは、うたを う  
たいました。空は、どこまでも どこまでも つづきます。

この場面の読みで、心しておかなければいけないのは、子どもたちはくものくじらに乗った1年2組の子どもたちになって読むだろうということです。自分たちも1年生、作中の子どもたちも1年生、だからそれは自然ななりゆきです。

ところが、ここの場面の文をよく読むと、前半は、くじらが主語になっているのです。つまり、「さあ、およぐぞ」と言って進んでいったのはくものくじらなのです。さらにもっと言えば、「うみの ほうへ、むらの ほうへ、まちのほうへ。」の主語もくじらなのだと考えられます。文章をよく見ると、これは一つの文であり、冒頭の「うみの」が改行されていないので、それは前の行との続きなのだということになるのです。

ということは、物語を読む子どもたちも「くものくじら」の側からも読まないといけないことになります。しかし、1年2組の子どもになろうとしている子どもたちの意識を無理やり変えるのはどうかと思われま。では、いつどのように「くものくじら」に視点を変えるか、難しいことです。

ところが、この学級の子どもは、真っ先に「くものくじら」の側から読んできたのです。

『くじらは、青い 青い 空の なかを、げんき いっぱい すすんで いきました。』ってさ、くじらは、元気いっぱいなんやなと思った」

「くじらぐものほっぺがさ、みんな乗ってくれて、うれしくなって、ほっぺが赤くなってね、絵が」  
「たしかに。……ついに乗ってくれた一っつ」

私は、なんという子どもたちなんだろうと感心して見ていました。これまでいくつも「くじらぐも」の授業を見てきたけれど、くものくじらの側から読み始める学級は少ないのです。それは、前述した理由で仕方のないことだと思ってきました。けれども、この子どもたちは、くものくじらの側から、

当たり前のように読み始めました。担任の先生が、これまで音読をたくさんさせて文章から読むというをしっかりやってきたからこのようにできたのでしょう。

さて、先ほど「お手紙」の授業について「ここが絶好機だ」と述べましたが、この授業についても、まさにここが絶好機です。ここでもやはり、「たしかに」というつぶやきにも似た本音の言葉が子どもから生まれ、その本音が「ついに乗ってくれた」というくじらぐもの喜びなのだという付け加えまで出してきたのです。そこに乗らない手はありません。

「そうかあ！ ついに乗ってくれた！かあ。 この文をもう一度音読して、そのくじらぐもさんのことを考えてみましょう。だれか、音読して」

と促して、音読を入れます。もちろん「さあ、およぐぞ」から「まちの ほうへ」までの音読です。そうしておいて、やはりペアで語り聴き合うのです。すべての子どもがこのときのくじらぐもについて考え語るためにはペアは絶対に必要です。

そういう手さえ打てば、子どもたちは必ずくじらにまつわることを考え始めるにちがいないという確信のようなものが私にはあります。それは、「青い 青い」と「青い」が繰り返されていることとくじらぐもの「げんき いっぱい」とをつなげて読むであろうということです。私は、こういう言葉に触れて読める子どもにしたいと思っています。けれども、それをいちいち発問して考えさせるということはしたくありません。でも、この授業のような場づくりさえすれば、子どもの中の何人かは気づいてくるにちがいません。それを出させれば、他の子どもたちも学んでいきます。

もう一つ、もっと気づいてほしいことがあります。それは、「うみの ほうへ、むらの ほうへ、まちのほうへ」という文が、くじらの意思を表しているということについてです。もちろん1年生の子どもがそんな気づきができるわけではありません。でも、「くじらぐもさんは、子どもたちを楽しませたいから、海にも、村にも、町にも連れていきたくったんだ！」という言い方をしてくるのではないのでしょうか。もしかすると、「子どもたちがさ、村にも連れてってっておねだりしたかもしれない。そしたら『いいよ』って、元気いっぱい行ったんだと思うな」などと考える子どももいるかもしれません。

「うみの ほうへ、むらの ほうへ、まちのほうへ」の「ほうへ」は、方向を表しているとともにその方向を目指そうという意味を表しているのです。それを感じ取らせないで、安易に、「海の何ができてきたの」「村には何があるのができてきたの」などと、文章に書かれてはいないことを言わせるだけの授業のなんと多いことか。もちろん、ここに記したようなくじらぐもの意思を感じ取ったうえでのことなら、挿絵に描かれているのですからそういう想像をしてもよいのですが。

そう考えると、くものくじら側から読むということはとても大切なことになります。そのきっかけをつかむのは簡単ではないのですが、この授業では、真っ先に子どもからそのように読んでくれたのです。

本稿の冒頭、「その題材のもっとも大切なことは、教師が教えようとしなくとも、必ず子どもが出てきます」と述べました。このような事例に出会うと、本当にそうなのだを確信を持てます。もちろん、先にも述べたように、授業をしたお二人が、普段からしっかり子どもたちに向き合い、先輩の先生方からたくさんを学び、とにかく実践してこられたからなのですが。

こういう先生がどこの学校でも育ってくれることを心から祈ります。

それにしても、子どもはいいですね。